

## 松本和也著 『太宰治の自伝的小説を読みひらく』 「思ひ出」から「人間失格」まで

野口 尚志 NOGUCHI, Naoshi

本書は、「太宰治」と署名された自伝的小説“に的をしぼり、従来『太宰神話』の枠組みを当てはめることで読まれてきた個々の作品の言葉を「字義通り」に捉えることをはかりつつ、作品をめぐる時代背景、様々なレベルの言説の撰取・批判を織り込みながら読み直すという作業を経て、作品そのものの持つ豊饒さを引き出していくことを目指すものである。

『太宰神話』とは、著者・松本和也氏の言をそのまま引けば、「太宰治その人の実在を前提とした上で、小説の作中人物（『人間失格』の場合は大庭葉蔵）を太宰治に二重写しにして理解していく認識枠組み」のことである。この『神話』から距離を測りつつ読むということは、「太宰治」を作品読解のコードとして素材に用いてしまう「実体（論）的な作者」観から作品を解放する試みとも言えるわけだが、この点は、昨年刊行された氏の著書『昭和十年前後の太宰治（青年）・メディア・テキスト』（二〇〇九・三、ひつじ書房）の問題意識を引き継いでいる。この前著に関して、山口俊雄氏は、その狙いを汲み取りながらも、『太宰神話

』の解体ということに重点を置く松本氏に対して「窮屈」さを指摘していた（『日本近代文学』二〇〇九・一一）。本書は、そういった批判への回答ともなっていると思われる。松本氏は、『太宰神話』を無下に排除してきたわけではない。その発生／派生する過程・背景を丹念に解き明かすことから、作品に潜在する読みの可能性を見出すのである。こういった方法は、「自伝」的と目される作品に焦点を当て、なおかつ「テキストをめぐる諸条件に徹底的な目くぼり」をしたうえで読みを進めるといふ本書において、より明瞭な形で用いられている。

このことをよく示すのが、恐らくは戦略的に選ばれたと思われる本書の表題の（読みひらく）という表現である。これは頻繁に用いられる表現では必ずしもあるまい。（読みひらく）とはどういうことか。先に言ってしまうえば、本書の魅力は、（読みひらく）ことと、そのためにはいかなる行程を通過すべきかということと同時に示そうとした点にあるのではないだろうか。

本書の用いる方法は、「序」に明確に述べられている。太宰治

の生誕百年（本書の問題意識に沿って正確さを期すならば、それは津島修治の生誕百年とされるべきなのだが）に伴う出版状況の概観から説き起こされ、その太宰の“現役作家”さながらの活況の中で世に問われた出版物がいずれも「太宰治の言葉であること」に焦点を合わせていること、そこに“太宰神話”もまた現役であることが見てとれるわけだが、その磁力に抗するために、かつて（引用の織物）として（テキスト）を定義したR・バルトと、それに続く議論として浅沼圭司の言を引き、（作者の意図と読者の意識の交錯によって織りなされるもの）として（テキスト）を定義し直す。となれば当然、（作者）は括弧に入れて作品を読むことになり、これによって読みの乱立や（誤読）の問題を避け得なくなることは踏まえつつ、「建設的な読みを一定の手続を経た上で提示」することを目指すという。こういった方法を具体的に用いた成果として示される各章のうち、その行き方をとりわけ丹念に示しながら論じられるのが、二章を費やした労作である、「思ひ出」論「I」および「II」（第一章、第二章）であろう。その「I」は、「太宰神話」以前の解釈枠組みを示すはずの同時代評の確認から始まり、亀井勝一郎らによってこの作品に「自伝」性が幻視あるいは捏造されていく過程を追いながら、あくまで作品の言葉に向き直ることで、「太宰神話」を誘引する内在的な表現機構をそこで用いられる人称の特性や署名と作中人物との関係のうちに見出す。こういった行程を経て、その虚構性は作品内から十分に読み取ることができると捕捉する。これを受けて「II」

で作品の精読に入り、自伝どころかこの作品は「過去そのものをいかに表象するかという自己言及的な問い」をはらんでおり、この点で、（読者）の参入を強いずにはいない「挑発的なテキスト」であったというところにまで思考を進める。氏はそこで、作品がつくりだすものとしての、あるいは作者の戦略と読者の読む行為とが交錯する「場所」を照らし出そうとする。ここにも、「太宰神話」といかにわたり合うかという著者の姿勢が強く刻みつけられている。

以降、「断崖の錯覚」論（第三章）では、書くことの暴力性を自覚することによる作家倫理の目覚めを、また「HUMAN LOS-」論（第四章）では、言葉の作用の自明化そのものを対象化する態度を、そして「富嶽百景」論（第五章）では、「富士山」を通して「≪対象≫と「解釈の多義性」の主題」の獲得を見、これらを経て、『津軽』論（第六章）へと至る。ここでは、「国／国家」に家論的な素地が露呈する細部を検証することで、「国／国家」に関わる言葉の差異をめぐる戦略性を明らかにし、「津軽人」としての「自己確認」などを目的とはせず、むしろ「津軽」／「国家」に、批評的に向き合う「異人」としての「私」の在り方を描き出すのである。これは、続く「十五年間」論（第七章）における、「私」＝津軽人の「書くこと」による自由の問題とも踵を接しているだろう。そして最後の『人間失格』論（第八章）は、松本氏のもう一つの著書『太宰治『人間失格』を読み直す』（二〇〇九・六、水声社）と相補的な論であるはずだが、津島美知子に

よって守られた草稿を組上に上げることで作家と作中人物との関係を整理し直し、これが「序」に示された方法論の最も端的な実践例ともなっている。

本書第八章の冒頭で、「太宰治はめぐまれた作家である」と氏は述べている。確かに、作品本文のみならず、草稿・書簡から同時代評その他のあらゆるテキストにこれほどアクセスの容易な作家も珍しい。その恩恵をいかに用いるか、用いて作品の可能性をどこまで引き出すことができるか。つまり、作品をより豊かなものとして読みの幅を（開き）、作品世界を未開の方向へと（拓く）のが本書である。前述したように、著者はそのための行程を段階を踏んで惜しげもなく開示しながら論じる。これによって、本書を読む者も、これから太宰作品を論じようとする者も、作品（論）の新たな側面へと（啓かれる）だろう。このように書かれた本書は、「太宰神話」の解体を経路としつつそこから飛躍し、テキストに内在する未知の「場所」にいざなうはずである。

（二〇一〇年三月、立教大学出版会、定価二四〇〇円十税）

#### ▼『太宰治の自伝的小説を読みひらく』目次

- 序 “『太宰治』と署名された自伝的小説”について考えるために
- 第一章 自伝的受容の形成／虚構の物語の現出——「思ひ出」Ⅰ
- 第二章 テキストの場所——「思ひ出」Ⅱ
- 第三章 騙られる名前／（作家）の誕生——「断崖の錯覚」
- 第四章 言語表現上の危機／批評——「HUMAN LOST」
- 第五章 「私」の再起／表現の達成——「富嶽百景」
- 第六章 旅人・翻訳・小説家——「津軽」
- 第七章 「ヤケ酒の歴史」と／を「書くこと」——「十五年間」
- 第八章 『人間失格』をめぐる本文生成——『人間失格』